雑学書庫 知識の記録

慣れ親しんだものと新しさのあいだ、コーエンの観光者類型（Cohen’s Tourist Typology）

記事のURL
https://www.gklibrarykor.com/ja/article/11312/

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

同じ国へ旅行に出かけても、旅の姿は人によって大きく違います。旗を持ったガイドについて決められた名所を巡り、夕食は韓国料理店でとる人もいます。一方で、リュック一つだけを背負って現地の人の家に泊まり、彼らと同じご飯を食べる人もいます。どちらも同じ旅行者なのに、なぜこれほど違う道を選ぶのでしょうか。この違いを説明する代表的な枠組みが「コーエンの観光者類型（Cohen’s Tourist Typology）」です。 コーエンの観光者類型とは、簡単に言えば「旅行者が慣れ親しんだものと新しさのどちらをより求めるかによって、観光者を四つに分けた分類」を意味します。イスラエル・エルサレムのヘブライ大学の社会学者エリック・コーエン（Erik Cohen）が、1972年に学術誌『ソーシャル・リサーチ（Social Research）』に掲載した論文「国際観光の社会学に向けて（Toward a Sociology of International Tourism）」で初めて示しました。 本記事では、この分類の土台となる慣れ親しんだものと新しさの概念から、四つの観光者の特徴、日常で見つかる例、そしてこの理論が残した意義と限界まで、順に見ていきます。 慣れ親しんだものと新しさで分けた四つの旅行者 慣れ親しんだもの、新しさ、そして環境の泡 コーエンは、あらゆる旅には互いに反対方向へ引っ張り合う二つの気持ちが混